

聞き手・文  
春日太一21世紀の国民的映像遺産  
名作の

長らく映画はフィルムで撮られてきた。その場合、撮影したネガを現像して上映用のプリントにし、それで初めて映像として目にすることができる。近年、そうしたフィルムIIアナログ方式で撮られた旧作を映画館での再上映やソフト化する際には、一度デジタルデータに変換する「リマスター」作業が行なわれている。

ではなぜデジタル・リマスターをする必要があるのか――。

長年にわたり現像やデジタル化



## その1 今のテレビが表現する情報量に合わせる

## 「東映」旧作映画

を担ってきた東映ラボ・テックのベテラン技師、根岸誠氏にその事情をうかがった。

古い作品はフィルムで撮影されているので、本当は今でもフィルムのまま上映してもらうのが一番良いんです。

しかし、もう残念ながら、今はフィルムで観られる劇場が数えるほどしかないで、観てもらうためにはどうしてもデジタル上映をする必要があります。そのために

フィルムのネガからデジタル化するわけです。

映画館の事情だけではありません。昔は、フィルムで撮った作品をビデオやDVDとしてテレビでかける場合は「テレシネ」といって、テレビ用のビデオデータに変換していました。しかし、テレビも以前よりはるかに綺麗に色が出るようになりましたので、テレシネよりもっと高精細なデジタルデータで観てもらう必要も出てきたんです。

そうした事情から「デジタル・リマスター」という言葉が言われ始めたんじゃないかなと思います。「リマスター」という言葉には「従来のテレシネとは違う」ということと、それだけでなく「元々のフィルムの質感は残そう」ということ、二つの意味合いが込められています。

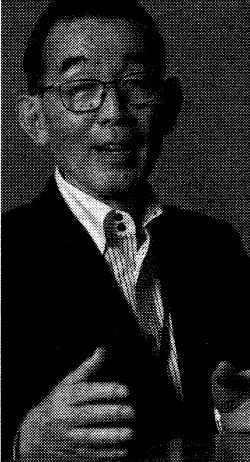
テレシネの場合は「テレビできれいに観られればそれでいい」という考え方がありました。以前のテレビは色が表現できる幅がとても少なかった。今のテレビは色が表現できる幅がすごく広がっているの、その分だけ――フィルム自体がそういう情報量をもとと持っているの――そこに合うように改めて再現してあげる必要が出てきたわけです。

――テレビ画面自体の表現できる情報量が元々少ないから、以前はそれでよかった。でも、そのために作られた画質では今のテレビだと厳しい。だからリマスターする必要はあるわけですね。

テレシネは情報量が少なかったからといって問題があったわけではなく、当時のテレビで観るのは何の支障もなかったんです。

デジタル・リマスター

根岸 誠



撮影／藤岡雅樹（本誌）

◆ねぎし・まこと／1948年生まれ、群馬県出身。東映ラボ・テックにて「突入せよ!『あさま山荘』事件」などでテクニカルコーディネーターを務める。17年に文化庁映画賞受賞。現在は東映デジタルラボ株式会社テクニカルアドバイザー。本年2月の調布市映画祭にて功労賞を受賞

◆かすが・たいち／1977年生まれ、東京都出身。映画史・時代劇研究家

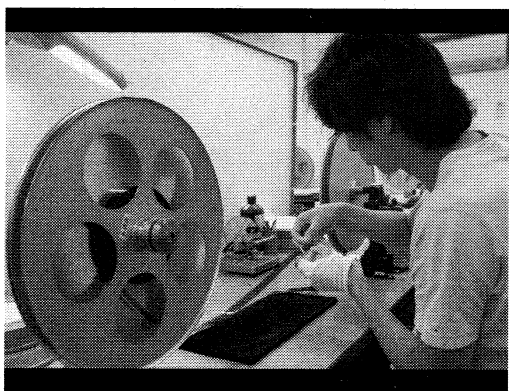
聞き手・文

# 春日太一

## 21世紀の国民的映像遺産 名作の

フィルムで撮った作品をデジタル・リマスターする背景を前回、東映ラボ・テックの根岸誠氏にうかがった。

その際に出たのが、元のフィルムには膨大な情報量が記録されていて、ようやくデジタルの機材がそれに追いついてきたという話。つまり、フィルムの方がデジタルよりも情報量が多いということだ。このことはデジタル・リマスターについて考える際の根本として最も重要な点といえる。

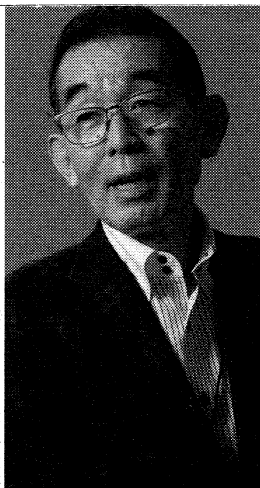


### その2 「坂」のフィルム、「階段」のデジタル撮影

#### 「東映」旧作映画

デジタルリマスター

#### 根岸 誠



撮影／藤岡雅樹（本誌）

デジタルはゼロか一かの世界なので、画と画の間の繋ぎ目が階段状になっているんです。その画質の高低は、階段がどれだけ細かいかということが決まります。

一方フィルムはアナログなので階段ではなく「坂」なんです。

段ではなく一本の線だと。フィルムの情報デジタル化することによって、いくつの階段によって坂としてどう表現するかということになります。それがデジ

タル・リマスターなのです。この技術が日々進化してきて、現在では線に近くなっています。

階段の幅が狭くなってきて、遠くから見ると線に見えるぐらいのところまで来ているということですね。

線に「見える」。まさにそうです。線そのものではないのですが、段が細かくなって線に見えるわけですね。

逆に言うと、フィルム、つまりアナログの「線の情報量」状態

が本来はベストなわけですね。

それがアナログの良さです。フィルムってすごく滑らかな映像表現ができていますね。だから、それをデジタル化するというのは、どうしても技術的にいろいろ困難な部分があります。

考えてみると、初期DVDソフトの映像ってカクカクしている印象がありました。まさに、段の幅が大きい感じでした。

機材の問題ですね。DVDが出た頃はSD (Standard Definition) という、低い解像度の時代だったので、今から比べると、もう本当に雲泥の差がありますね。

近年は撮影もフィルムからデジタルになっています。それでもリマスターという言葉の方がされることはありますよ。

デジタル撮影の初期の頃は、今より解像度が低いです。それも当時の技術の問題でした。デジタル撮影の映画の弱点は、撮った解像度以上にはならないんです。

ただ、今は技術が進歩して、撮った解像度、つまり段の幅を細かくする技術は進歩してきています。アップコンバートという言い方をしますが、常に変化しています。

※あすが・たいち／1977年生まれ、東京都出身。映画史・時代劇研究家

※ねざし・まこと／1948年生まれ、群馬県出身。東映ラボ・テックにて「突入せよ!『あさま山荘』事件」などでテクニカルコーディネーターを務める。17年に文化庁映画賞受賞。現在は東映デジタルラボ株式会社テクニカルアドバイザー。本年2月の調布市映画祭にて功労賞を受賞

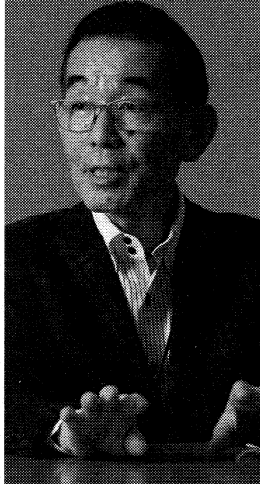
聞き手・文  
春日太一21世紀の  
国民的映像遺産  
名作の  
下作の

## その3 「どう見せたいか」に合わせたリマスターを

## 「東映」旧作映画

デジタル・リマスター

根岸 誠

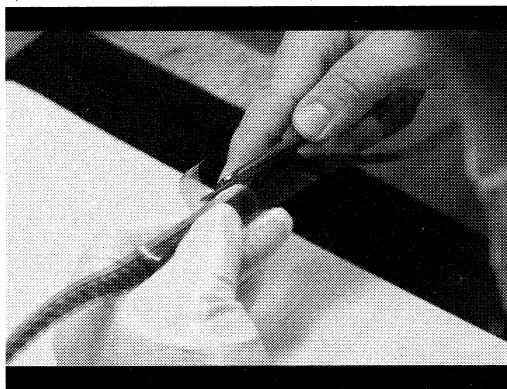


撮影／藤岡雅樹（本誌）

高画質に「デジタル・リマスター」された旧作映画を見る際、記憶にある映像と異なって感じることもある。ただ、その感じ方は一通りではない。

「前に見た時はもつと暗くて深みがあった気がするけど、なんだか明るくなっているな」となる時もある。あれば、「前は劣化・退色していたのが、見事に復元されているぞ」となる時もある。

その違いは何なのか。東映ラボ・テックの根岸誠氏にうかがった。



デジタル・リマスターの考え方は根本的には二通りあります。

一つは、つくった当時の色合いを可能な限り再現するという考え方。もう一つは、当時つくったものを現在の視聴者に気持ちよく見ってもらうという考え方。

このどちらを選択するかは、供給する側が考えるわけです。

DVDメーカーや映画会社の方針次第で決まるわけです。それは私どもの立場では決められることではないので、「どちら

が希望ですか」と尋ねるところからスタートすることになります。

——もともと暗い映像の作品だったのが、リマスター版を見たら、別物かと思うくらい明るくなって、いることがあるのですが、それは現代の視聴者に見やすくするためというのもある、と。

たとえば製作当時は、画面を暗くすることが確かに目的ではあったと思うんです。だから、当初は撮影当時に狙った通りに上映しているのに暗いんですよ。

でも、DVDを出す頃には暗い部分を明るく見せる技術ができました。ですから、明るく見せようと供給側が希望をすれば可能になったということです。メーカーだけでなく実際に撮った監督さんやスタッフさんにご意見をうかがい、見せ方を調整することもあります。

——東映の旧作をリマスターする基本方針はどちらですか？

そのへんは私どもの技術者の立場から言うと、正直よくわかりません。作品ごとに「この作品って、どんな感じでいきますか？」と聞いていますね。

——貫いた方針があるというよりは、作品ごとにリマスターのスタンスが違っているのですか？

「今回はこういう目的で販売したいから、こうしたい」というコンセンサスを供給側がまとめ、その方針が私ども技術者に伝えられるので、東映の作品が常にどっち側かというわけではないのです。

——そうになると、幅広い技術や見識が必要になってきますね。

注文にできるだけ正確に伝えられる技術は用意しておこうという考え方であります。

※かすが たいち／1977年生まれ、東京都出身。映画史・時代劇研究者

※ねざし まこと 1948年生まれ、群馬県出身。東映ラボ・テックにて「突入せよ!『あさま山荘』事件」などでテクニカルコーディネーターを務める。17年に文化庁映画賞受賞。現在は東映デジタルラボ株式会社テクニカルアドバイザー。本年2月の調布市映画祭にて功労賞を受賞

聞き手・文  
春日太一21世紀の  
国民的映像遺産

## 名工下作の

フィルムで撮られていた旧作をデジタル・リマスターして撮影当時の画質に近づけようとするためには、当初のフィルムにどれだけの情報が記録されていたのかを把握しておく必要がある。

その確認はいかにして行なわれているのか。東映ラボ・テックの根岸誠氏にうかがった。

とにかく上映用のプリント（ポジフィルム）を見るしかありません。



## その4 退色加減も見定められる「職人の目」

## 「東映」旧作映画

デジタル・リマスター

## 根岸 誠

ただ、上映用のプリントも年数が経つと色が退色してきているんですよね。なので、退色の度合いを想定しながら確認しています。

弊社の技術者は、現存しているフィルムがあれば、そのフィルムをお借りして、社内の試写室で見確認します。

その上で、今回の作品はこういう仕上がりにしてほしいという要望があれば、それを踏まえて作っていくということになります。

退色したプリントを見て、そ

こから本来の色を想定していくのですか？

それしかありません。プリントを見るといふ部分ではみなプロなので、そこは大丈夫です。

現像されてから何年経っているか、またどのくらいの回数上映しているか。そのあたりを計算しながら確認するわけですね。

はい。また、退色の度合いというのは保存状態で違います。ですので、そういうことも考慮しながら見ていくということではない

のです。

どこか、歴史学とか考古学に近い部分も感じられます。

そこまではシビアでないと思っています。長年いろいろなフィルムを弊社の技術者は見てきていますから。今はまだこのように経験をいかせる人がいる時期です。ただあと十年もすると、そういう技術者が、多分、いなくなります。

若い技術者はネイティブでアナログを知らない世代になるため、フィルムの質感や色味を感覚で判断しにくくなってしまおう、と。

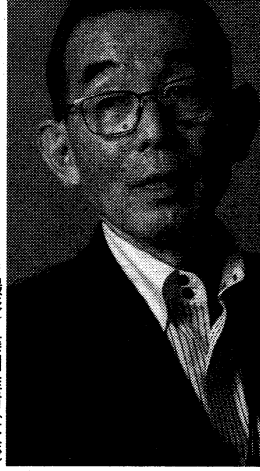
そうですね。そのへんの色の判断ができる人は六十代以上なので、ですから、リマスターできるものは今のうちに全てやっておきたいぐらいなんです。まあ、これはなかなかそう簡単にはいきません。

旧作となると、カラーだけでなくモノクロの作品もあります。その場合、リマスターの仕方に違いはありますか？

モノクロの場合、プリント自体は退色というより、経年で軟調になつてしまうんです。当時よりフラットになつて見えてきてしまう。撮影当時のコントラストというか、硬さを再現するのが難しいんです。

＊かすが・たいち／1977年生まれ、東京都出身。映画史・時代劇研究家

＊ねざし・まこと／1948年生まれ、群馬県出身。東映ラボ・テックにて「突入せよ!『あさま山荘』事件」などでテクニカルコーディネーターを務める。17年に文化庁映画賞受賞。現在は東映デジタルラボ株式会社テクニカルアドバイザー。本年2月の調布市映画祭にて功労賞を受賞



聞き手文  
春日太一21世紀の映像遺産  
国民的映画遺産  
名作の

その5 今の技術では「見えてしまう」もの

旧作、特に一九七〇年代の映画には独特のザラつきがあり、「仁義なき戦い」（一九七三年）をはじめ、そうした粗い質感のもたらず荒々しさや乾きが作品の大きな魅力となっていた。

その質感を損なわずにデジタル・リマスターする方法について、東映ラボ・テックの根岸誠氏にうかがった。

ザラつきというのは、結局はフィルムの粒子なんです。そして



「仁義なき戦い」

日本映画専門チャンネルにて放送中  
くわしくはnihon-eiga.comにて。

©東映

場合もあります。

一方で経年による退色で粗くなっている場合もありますよね。その違いの見極めはどうされていますか？

通常の考え方からすると、スクリーンをしたときに「ああ、このシーンは間違いないけど粗く撮っているな」というのは、リマスターをやる技術者はわかるんです。

リマスターで画面が鮮明になることによって、当時は作り手が「これは見えないだろう」と思っていたものが見えてしまうこともありますよね。

美術のディテールなど、製作意図として、明らかにこれは見せたくないんだらうなという部分は見えなくしています。

当時の技術で「こうやって撮影すれば、あれは見えないな」と思っただけ撮影しているのは、見ればわかります。

ただ、すみずみまで全て調整できるのは、なかなか難しい。ピジネスという側面もある以上、時間を無尽蔵にはかけられないわけです。

それでも可能な限り、調整をしつかり重ねたいと思っています。

『仁義なき戦い』  
4Kリマスター

デジタル・リマスター

根岸 誠

その粒子はどんなに高精細にスキャンしても、そのまま出るんです。ただ、そのままリマスターすると、すごくザラザラとして、今の若い人にとって、とても見づらい画になってしまうのです。

ですがフィルムで観た記憶の強い世代からすると、「これだよ、これ」つてなるんですよ。ですから、「どの層に向けて見せるのか」という方針によって、粒子の大きさ、目立たなさを調整するんです。

粒子一つとっても、見え方を調整しているんですね。

いろいろな調整が技術的にできるようになったので、当時は「こんな細かい粒子を持ったフィルムはなかったよね」というようなフィルムの表現もできます。

粒子をなくすこともできれば、さらに細かくもできる。

そうですね。あくまで「見た印象」の上ですが、細かくできます。

七〇年代の映画ですと、作り手が狙って映像を粗くしている

◆かすが・たいち／1977年生まれ、東京都出身。映画史・時代劇研究家

◆ねぎし・まこと／1948年生まれ、群馬県出身。東映ラボ・テックにて「突入せよ!『あさま山荘』事件」などでテクニカルコーディネーターを務める。17年に文化庁映画賞受賞。現在は東映デジタルラボ株式会社テクニカルアドバイザー。本年2月の調布市映画祭にて功労賞を受賞